特集

ワーケーションはじめました

コロナ禍で注目されるようになった「ワーケーション」。メディアなどでその言葉を見たり聞いたりしたことがあるかもしれません。でも、「ただの旅行や出張とどう違うのか」「興味はあるけれど、何をすればよいのか」など分からないことも多いかと思います。そこで、今年の夏休みのテーマは、「ワーケーションはじめました」として、観光庁に設置された「『新たな旅のスタイル』に関する検討委員会」の委員であり、日本におけるワーケーション研究の第一人者である山梨大学の田中敦教授による解説やコメントとともに、広報室メンバーによるワーケーション体験記をご紹介します。この夏、普通の旅行とは違うワーケーションを実践してみてはいかがでしょうか。

田中 敦 教授

山梨大学生命環境学部教授

横浜国立大学卒業後、JTBに入社。2000年に本人出資型社内ベンチャーとしてJTBベネフィットを起業し、取締役に就任(2022年4月にパソナグループに事業売却)。2016年から現職。日本国際観光学会ワーケーション研究部会部会長、観光庁「『新たな旅のスタイル』に関する検討委員会」委員。

第1部 田中教授による事前レクチャー

1 日本におけるワーケーションの動向

ワーケーションは、もともとは休暇中に仕事をすることから始まった言葉で、欧米でスタートしたと言われています。日本では2018年頃から動きがありましたが、特に、地方において、UターンやIターンをはじめとする様々な形で移住を推進したり、既存の企業の仕事を地方でもできるように「ふるさとテレワーク推進事業」(注1)や「地方創生テレワーク」(注2)といった事業を総務省や内閣府を中心に実施していた経緯があります。その中で、休暇中や帰省中に仕事ができるようになれば、移住や定住の手前のいわゆる「関係人口」として地方に来てもらえる人を増やすことができるのではという考え方が出てきました(注3)。また、地方にコワーキングスペースのような場所が少しずつ増えてきたことで、そのような施設や仕組みを誘致したい自治体が集まり、2019年11月に「ワーケーション自治体協議会」が設立されました(注4)。

このように「旅行のついでに」ではなく、いろいろな形で地方にじっくり滞在してもらう試みが少しずつ始まりました。図1

その後、コロナ禍で多くの企業がテレワークを実施せざるを得なくなりました。一番多いときは7割弱程度の企業がテレワークを実施していたと言われています(注5)。しかし、コロナ禍で企業が出張を制限している時期にワーケーションを推奨することは困難でした。

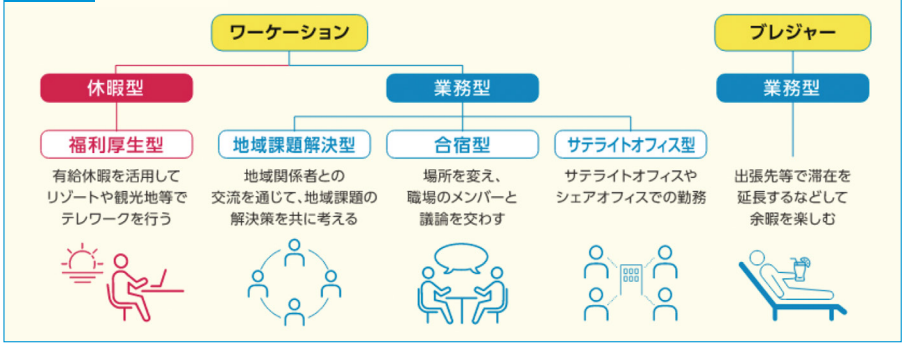
コロナ禍の制限が解除されて自由に動けるようになってきた2023年はワーケーション元年と言われています。

2 ワーケーション実施による効果

ワーケーションのステークホルダーは大きく分けて3種類です。中心は働く人ですが、企業やワー

(注1)https://www.soumu.go.jp/main_content/000345803.pdf (注2)https://www.chisou.go.jp/chitele/index.html (注3)総務省 関係人口ポータルサイト https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html (注4)ワーケーション自治体協議会公式ページ https://www.facebook.com/WorkationAllianceJapan/
(注5)東京都テレワーク実施率調査結果 https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2022/09/12/04.html

図1 実施形態（イメージ）



（観光庁のHPより　https://www.mlit.go.jp/kankocho/workation-bleisure/）

ケーションを受け入れる側もステークホルダーです。受け入れる側は、関係人口が増えることで、結果的に地域に経済的な効果や交流が生まれます。地域の子供と都心の子供と交流する親子ワーケーションなども広がっていますし、宿泊施設やコワーキングスペースなどの集客にも役立っています。

ワーケーションを推進することによって、企業側にどのようなメリットがあるのかについては様々な議論がなされています。一番分かりやすいと思われるのが、環境を変えて仕事をすることで日頃とは違う脳の使い方やリフレッシュに役立ち、それが健康経営やウェルビーイングにつながるというものです。例えば、NTTデータ経営研究所においてワーケーション中の対象者にウェアラブルデバイスを装着してもらって、行動データを検証した事例があります(注6)。普段ストレスを感じながら仕事をするのと、森の中で新鮮な空気を吸っていつもと違う環境でおいしい朝ごはんを食べてから仕事をするのと、どっちがリフレッシュした状態で仕事ができるかといったら、結果は明らかです。もちろん、これまで1分間で10しかできなかった仕事がリフレッシュしたことで12できるようになったとしても、そのような作業効率の上昇が生産性の向上といえるのか、リフレッシュすればいいだけなら、別にワーケーションを推進しなくてもできるだろうといった様々な議論がありますが、短期的にはフィジカル面でもメンタル面でも効果があるといった実証データはあります。

その一方で、現在ワーケーションの大切な効果として注目されているのが「越境学習」と呼ばれるものです。日頃と違う、ホームではない環境で、誰かと一緒にするという意味なのですが、純粋に場所が変わるというよりも、例えば、皆様は弁護士ですが、アーティストの人たちに囲まれて仕事をしたら、結構なアウェイ感があるのではないでしょうか。自分たちと違う思考パターンをもっていたり、業界用語や業界のあうんの呼吸が通じないといった環境で仕事をしたりすると、今までとは違う発想が浮かぶかもしれませんし、実際、そのような環境で仕事をすることを志向する人が増えてきています。企業としても、そのような志向を否定するようだと、魅力的な人材をひき付けられないという事態も起こり得ます。

さらに、ワーケーションをする人々を受け入れる地域の側も学びや気付きが多く、ともに何かをつくり上げる「共創」という現象も出てきます。このことは「被越境学習」と呼ばれています。

このように、リゾートや自然の中でリフレッシュできることだけがワーケーションの効果ではなく、いつもと違う創造性が生まれたり、いわゆるエンゲージメントが高まっている状態につながったりするといったことも重要な効果として挙げられています。さらに、もともと、個人が「サードプレイス」という職場や自宅のほかに安心できる居心地がいい場所（例えば、都心のカフェ）を持つことで、自分らしさを保ちつつ働きやすさが増すという状況がありますが、都心から遠い場所にサードプレイスを持つという発想もワーケーションにつながるかと思います。

以上のようなことが、リアルにワーケーションを行うことの大きな効果ではないでしょうか。

3 弁護士とワーケーション

では、士業や個人事業主はどう考えればいいの

（注6）https://www.nttdata-strategy.com/newsrelease/200727.html

でしょうか。

いろいろな関係性の中で、結果的に時間や場所の制約があるとしても、自由度が高い働き方だといえます。そうなると、働こうと思えば、いくらでも働けてしまう環境にいるわけです。いわゆるワーク・ライフ・バランスを追求しようとしても、現実的にはワークもライフも連続して区別がつかないような状況になっていることが多いのではないかと思います。

ライフタイムを長い目で見て、そのような生活が本当にハッピーなのか、家族との関係性やいろいろな自分の仕事以外でのつながりなどを点検する時間をつくるという意味でも、例えば「1年のうちに10日間は仕事以外の関係性を構築する時間をつくる」といったきっかけとしてワーケーションを実践してみるのもよいかと思います。

ChatGPTの出現など、ますますIT化が進む中で、おそらく弁護士の仕事のやり方も変わっていくだろうし、何よりもクライアントの状況が大きく変化していくと思います。そのような時代の節目を迎えて、様々な人とコミュニケーションをとることの意味が今まで以上に重要になるかと思います。もちろん、好き嫌いはあるかと思いますが、様々な価値に触れるなど、いろいろな可能性をポジティブに捉えてみていただければと思います。

第2部 ワーケーションをやってみた

広報室メンバーが3つのチームに分かれ、自分たちなりのワーケーションを実践してみました。

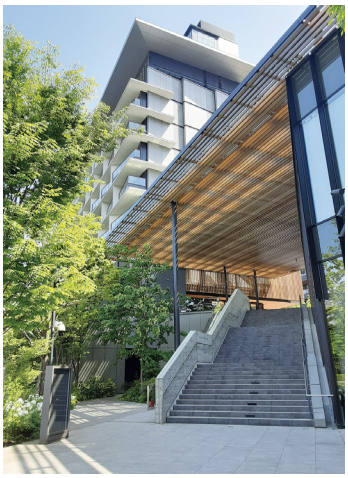
1 立川

Well-beingがコンセプト
都内で味わえる特別空間

“ワーケーションいいなぁ、チャレンジしてみたいなぁ。でもいきなりまとまった時間を取って遠出するのは勇気がいるし、難しい…。”という方には、都内で手軽にできるプランはいかがでしょうか。

取材に行ったのは、立川にある「SORANO HOTEL」。立川駅北口から、東京地裁立川支部に向かう道の途中に位置します。

今回利用したのは、デイユース5時間体験プランです。1部屋4人まで利用でき、10:00~22:00の間のお好きな5時間を利用することができます。それでは、取材班の体験レポをご覧ください。



ホテル外観

10:00 チェックイン

駅前の雑踏を抜けわずか数分、突如まるで高原かのような景色が目の前に広がります。

ホテルロビーは、「グランピング」をイメージしたという造りで、優雅な空間になっています。

ホテルの宿泊者（デイユースプランを含みます）は、ロビー脇のラウンジでフリードリンクをいただくことができます。紅茶やコーヒーは、7時間

ホテルロビー

程度保温できるおしゃれなボトルに詰めて部屋へ持ち込むことが可能です。もちろんラウンジで景色を眺めながら飲むこともでき、その場合には、メニューのバリエーションも多くなります。朝には、パンが、夕刻にはスープが用意されています。

11:00 お部屋で仕事

客室は、全室昭和記念公園に向かって窓が設置されているパークビューで、テラス付き。お天気が良ければ、富士山や多摩の山々を望むことができます。1階ラウンジでいれてもらったドリンクはもちろん、そのほか自身で用意した料理や飲み物の持ち込みも自由です。なお、ペット同伴可のお部屋も複数あり、大変人気を博しているとのこと。

取材時には、窓を開けると、BGMを流しているのかと聞き間違うほどにウグイスの鳴き声がクリアに響いていました（天然の野鳥のさえずりです）。

客室

13:00 ランチ

お昼には1階にあるレストランでランチ御膳をいただきました。これはデイユースのオプションで付けたものですが、時期によりランチメニューのほか、エステなど多様なオプションが取り揃えられています。屋内とテラス両方に席があります。

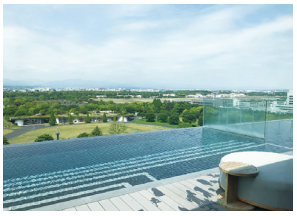
ランチ

食材は土地の野菜を中心に使用していて、和食をベースとした創作料理となっています。

14:00 インフィニティプール

これがこのホテル一番の見どころ！全長60メートルの長さのインフィニティプール！ここから眺める景色は圧巻です。水面と空が一体化し、無限に広がっているように感じられ、シンガポールのマリーナベイ・サンズさながらの迫力を感じます。

プールの水は立川の源泉から汲み上げられた天然温泉で、真冬でも真夏でも入ることができるよう、季節に合わせて温度が調節されています。大人が立って入ってちょうどの深めの箇所もあれば、子どもが利用できる浅瀬も用意されています。正面は雄大な自然ですが、右手に視線を向けると立川支部を眼下に望むことができるので、法曹関係者の皆様はそういった独特な（？）景色の楽しみ方をするのも一興でしょう。



なおこのプールが位置する最上階には、インフィニティラウンジがあり、プール利用時にドリンクを飲むことができますし、ルーフトップバーではプールには入らず室内で景色とお酒などを楽しむこともできます。

最上階から水着のまま階段をひとつ下の階に降りると、インドアスパがあり、こちらも広大な温泉とジャグジーが備え付けられています。

もちろんジムも併設されています。3Dボディスキャナ計測で、見た目では分からない筋肉量・脂肪量・筋肉バランス・体成分などの体の内側を測定し、その結果に基づいて個人に合わせたパーソナルトレーニングをするメニューがあります。筋トレ好きの方にも打ってつけですね（別料金・要予約）。

15:00 チェックアウト

ホテル利用者の約7割は、都内にお住まいの方とのことで、取材をした日は平日でしたが、ビジネスマンと思われる方をちらほらと目にしました。とてもスタイリッシュなホテルですが、子どもの利用も歓迎で、部屋にベビーベッドを入れるなどの対応もあり、子どもをプールで遊ばせながら自身は部屋やプールサイドで仕事をするという使い方が人気となっているそうです。

“東京にあって東京にないホテル”の呼び声どおり、長距離移動の時間や費用をかけないで、非日常空間を満喫できます。限られた滞在時間でいつもとちょっと違う環境だからこそ、リフレッシュできるとともに、斬新な発想が生まれて仕事がはかどるという効果が得られるのではないでしょうか。

お問い合わせ：SORANO HOTEL
https://soranohotel.com/

2 富士吉田市（山梨） 富士山麓でワーケーション

西川・宮田の2名で、田中教授に紹介いただいた富士吉田市でワーケーションにチャレンジしてきました。

富士吉田市には新宿から電車、またはバスで2時間ほどで行くことができます。

到着して、まずは富士吉田市役所地域振興・移住定住課の飯野さんと北田さんからお話を伺いました。

富士吉田市でワーケーションを充実させているのは、移住やサテライトオフィス誘致を進めていた市が、2022年春から新たな事業として市内にリモートワーク可能な場所を多数整備し、いわば「お試し」でワーケーションに来てもらい、ゆくゆくは移住やサテライトオフィス開設につなげてもらうためとのこと。

富士吉田市役所地域振興・移住定住課の皆さん（左）と

富士山駅のドットワークPlus

具体的には、「富士吉田市まるごとサテライトオフィス（以下、まるサテ）」(注7) として、市内40か所ほどの施設を提携ワークスペースとして利用できるように整備。利用者はアプリ（anyplace）をインストールして、各スペースでアプリを使ってチェックイン、チェックアウトして、利用料を支払う仕組み（時間単位や1日当たりなど料金体系は各種）。ちなみにこのアプリは、全国の提携施設で利用することも可能です。

（注7）https://marusate.jp/

さらに、利用者の利用時間に応じて、施設側にも利用料を支払う仕組みになっています。これによって施設側にもインセンティブが発生することもあり、多くの施設が「まるサテ」に参加しています。老舗カフェ、こだわりのカレー屋さんや地域で愛される食堂、さらには富士急ハイランドのベンチまでが提携ワークスペースになっているとのこと。家族で富士急ハイランドに行き、午前中はカフェで仕事、午後からは家族と合流して楽しむという使い方もできそうです。

多くの施設の参加によって、場所だけでなく人とのつながりを深めてもらい、例えば移住に先立ってのローカルな情報収集などにもつなげてほしいという願いもあるそうです。

弁護士業務での利用を考えると、仕事の内容によっては個室が必要な場合があります。

その際は個室や会議室を備えている施設もあるので、提携ワークスペースを検索する際に条件を加えれば、この点も解決しそうです。

それでは、実際に利用したコワーキングスペースを紹介します。

■ドットワークPlus（富士山駅）

富士山駅ビル内にあるサテライトオフィス拠点。コワーキングスペースやカフェ機能などがあり、いわば富士吉田市のワーケーション出発基地です。

フリーのワークスペースだけでなく、複数人でのリモート会議対応の会議室や、遮音性の高い個室スペースもあります（会議室、個室などは有料）。もちろん、電源やWi-Fiも完備。

今回は、遮音性の高い個室スペースでオンラインミーティングに臨みました。

1人用を利用したところ、最初はちょっと狭い感覚がありましたが、すぐに慣れました。大型ディスプレイもあり、PCにつなぐことができるので作業もはかどります。ただ、角度によっては外からモニターが見えるので、内容によっては、用意されているカーテンなどで仕切ることが必要そうです。

■ドットワーク富士吉田

富士山を真ん前に見るロケーションは、ここならでは。なぜか、仕事がはかどりそうな気がします（笑）。

自由席のワークエリア（一番よく富士山が見えます）だけでなく、大型ディスプレイを備えた会議室やミーティングブース、更にはイベントエリアや雑談エリアなどもある本格的コワーキングスペースです。電源やWi-Fi完備はもちろんですが、大型ディスプレイが各席にあり、マウスなどのPC小物も貸出し可能となっているなど、充実の設備です。時々、利用者の皆さんを集めての懇親会なども開催されるようで、地域を盛り上げる核となる施設の一つのようです。

今回は、朝イチということもあってか、あまり人がいなかったので、メールチェックなどは自由席でこなし、その後の会議には会議室を借りて臨みました。会議室などは別料金なのですが、アプリを使えばすぐに予約・決済が可能。スムーズに利用できました。富士山を前にしていたからか、普段よりも大きな視点で会議を進めることができました（本人比）。

■.work RESIDENCE

富士山駅から徒歩数分の距離にある、中期滞在可能施設で、寝具やキッチンも完備されており、快適に過ごすことができました。すぐ下の階には、24時間365日使用可能な無人コワーキングス

ペース「.work ANNEX」が設けられています。

ここはまさに個室ですので、観光と観光の間に戻って会議というスケジュールを組むこともできます。

■その他

今回は時間の関係で見学をさせていただいただけになりましたが、富士山信仰文化の面影が残る「富士山北口御師 菊谷坊」、富士吉田市役所東庁舎5階展望スペース、富士急ハイランドのリサとガスパールタウン内のカフェ「ブリオッシュ」も提携ワークスペースになっています。

また、富士吉田の地ビール「ふじやまビール」を楽しめるレストラン「ハーベステラス富士吉田」から、広報室の会議に参加してみました（もちろんノンアルコールです）。

短い滞在期間でしたが、貴重な経験をすることができました。皆様もぜひ、富士吉田市でワーケーションを体験してみてください。

富士山北口御師 菊谷坊

富士吉田市役所東庁舎5階展望スペース

ふじやまビール「ハーベステラス富士吉田」にてオンライン会議

3 鎌倉 鎌倉でワーケーション

都心から電車で1時間ほど。海と山、歴史と文化に触れることのできる観光スポットとして人気の鎌倉は、ワーケーションのお勧めエリアでもあります。鶴岡八幡宮や鎌倉大仏、長谷寺といった定番スポットのほか、それ以外にも落ち着いた雰囲気の寺社仏閣や庭園、グルメスポットなど見所は多く、さらに江ノ電や自転車で足を延ばせば江の島の観光も楽しめます。鎌倉は街を挙げてワーケーションを推進していて、市のホームページではテレワーク施設の一覧やイベント情報などが紹介されています。(注8) 東京からの日帰りワーケーションなら鎌倉。ということで、いざ鎌倉へ。

■ ハルバル材木座

鎌倉駅から南東方向に歩いて15分。観光客がほとんど訪れない静かな住宅街の一角に「ハルバル材木座」(注9)があります。ここは、オーナーの伊藤賢一さんが23年間家族で暮らした自宅を改装した、コワーキングを中心とする交流スペースです。

1階には畳の打合せスペース、2階にはコワーキングやワークショップに使える広い空間と、ウェブ会議などに利用できる半個室のほか、ソ

(注8) https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/telework/index.html　(注9) https://harubaruzaimokuza.com/

ファを置いたリラックスゾーンやキッチンもあります。

都内からの利用者が多く、個人での利用のほか、企業のオフサイトミーティングに利用されたり、懇親を兼ねたものではキッチンで一緒に料理をしたりするといった利用もあるそうです。事前に連絡すればドロップインでの利用も可能で 、私が取材をしているときにも、女性の利用客が一人やってきて、奥の半個室でウェブ会議をしていました。

「個人でここに来る人は、やっぱり鎌倉が好きというのがベースにあって、選んでここにやって来る」と伊藤さん。海があって山もあって鳥のさえずりも聞こえて、そういう自然の良さもさることながら、鎌倉の良さは何よりもそこで暮らす「人」だと伊藤さんは言います。「鎌倉は、自分のやりたいこと、自分らしい生き方をすることに積極的な人が多い。ちょっとSOSを出したら、そんな人たちがいろんな人をつないでくれて助けてくれる。この雰囲気は鎌倉にしかない」。

伊藤さんは、日替わりの店主がカウンターに立つ「**まちのスナック**」(注10)で、ときどきマスターもしているそうです。「最高なのは、ここで昼間仕事して、夕方、**材木座海岸**に行く。夏なら海の家がある。材木座の海の家は由比ヶ浜の海の家とは雰囲気が違ってしっとりしている。駅のほうに少し戻ると、『**清水湯**』という銭湯がある。その向かいにお好み焼き屋がある。海に行って、銭湯に行って、目の前のお好み焼き屋に行く。飲み足りなければ『まちのスナック』に行く。そこに行けば交流が生まれる。駅の近くだからすぐ帰れる」。

伊藤さんのお勧めコース、ぜひやってみたいと思います。

■ ThinkSpace鎌倉

伊藤さんに教えてもらって次に向かったのが稲村ガ崎の「ThinkSpace鎌倉」(注11)。かつて陶芸家の人が2階を住居、1階を作業場として使っていた民家をコワーキングスペースに改装した空間で、落ち着いた静かな空気が漂っています。1階の土間には集中してPC作業のできるカウンターがあり、囲炉裏の間ではリラックスやオフサイトミーティング、2階に2つある個室ではオンライン会議も可能です。

ThinkSpace鎌倉を主宰する岩濱サラさんが大切にしているのがマインドフルネス。「自分の内側から起こってくること、私は何がしたい、どう生きたいというところに立ち返ると、すごく仕事も楽しくなるし、“休みの時間、仕事の時間”という考えすらなくなってくる」と岩濱さん。

「私たちが大事にしているのは、“余白”を持つこと。自分自身の中にも、人間関係の中にも、余白をつくって、あえてゴールだけを目指さない。そういう時間をつくるともっと豊かな未来が待っている。ここは空間自体が人の心をファシリテートしてくれる場所」。たしかにこの場所で仕事をすれば、いつもとは違うアウトプットが生まれそうな気がします。

岩濱さんお勧めスポットは**稲村ヶ崎温泉**。目の前に広がる海を見ながら温泉につかることができ、晴れていれば富士山も見えます。

(注10)https://snack.machino.co/　(注11)https://thinkspace.jp/

■ 鎌倉での移動はシェアサイクルがお勧め

さて、今回の取材で私は3回鎌倉を訪れたのですが、現地での移動にはシェアサイクルの電動アシスト自転車を使いました。レンタサイクルだと返却場所が固定され、何より返却時間が気になりますが（しかも閉店時間がかなり早い）、シェアサイクルだと、好きな時間に、空いているステーションに返却すればいいので、行動の自由度が飛躍的に高まります。鎌倉に行くときは事前にアプリを入れてアカウントを作っておきましょう。

■ その場所と緩やかにつながる

今回の取材を通じて思ったのは、ワーケーションというのは1回行って帰ってきて終わり、というものではなく、何度も足を運んで、その場所とそこで過ごす人たちと緩やかにつながって自分の居場所をつくっていくことなのだろうと感じました。そのまま移住してしまう人も結構いるそうです。

鎌倉では、年に2回ほど、だいたい5月と11月に「**鎌倉ワーケーションWEEK**」を開催しています(注12)。伊藤さん、岩濱さんのほかにも、鎌倉を愛するウェルビーイングの実践者たちが、様々なプログラムを提供しています。気になった方はぜひサイトをのぞいてみてください。

第3部 ワーケーションをやってみた後の振り返り座談会

田中敦教授

森田（広報室） ワーケーションについて、海辺や高原のリゾートで仕事をするといったイメージを持っている人も多いと思います。田中教授による事前のレクチャーにおいて、自分と違う価値観の人々の中で自分が違和感を覚えることで、新たな発想が生まれるかもしれないという説明がありましたが、実際にそのような現象が起き始めているのでしょうか。

田中教授 観光名所があるからそこに行くという行動パターンだと、滞在期間や訪問回数も少ないのが実情です。例えば、山梨県に昇仙峡という観光名所があり素晴らしいところなのですが、「1回行けばいいや」というのが通常です。ワイナリー見学も、ただ「おいしいから」という程度の理由だと単発の訪問で終わってしまいます。

では、どのような人が繰り返し訪問しているかというと、ワイナリーの作り手の人と話をしてワインを飲んで、お土産を買って帰り、別の機会にまた訪問して交流して関係性をつくっていくパターンです。そのワインがずば抜けておいしいかというと、そこが重要なのではなく、翌年もワインができた際に、配送してもらうのではなく現地

（注12）https://www.kamakuraworkation.com/

に出向いて再び作り手と交流をして関係性を構築していくのが楽しいということです。

そうやって、いろいろな人と会ううちに、面白そうな場所には面白そうな人々が集まり、その中で自分が居心地よいコミュニケーションがとれる人々と出会い、つながりができることを実感できると思います。

森田 私たち広報室メンバーも、自分たちなりのワーケーションを体験してみました。その中でも、富士吉田市は地元の方と交流するチャンスをつくりやすい場所だったかと思いますが、実際、いかがでしたか。

西川（広報室） 私は、富士山がよく見えるコワーキングスペースで仕事をしたりしました。仕事中は周囲の人と交流するという感じではありませんでしたが、夜に、職員さんに地元の人が多く集まる焼き鳥屋に案内していただきました。その場で特別込み入った話をしたわけではありませんが、そこに行かないと聞けない話が聞けたと感じています。また、旅行かワーケーションかは分かりませんでしたが、地元の人ではない若い一般客も来ており、出会いや交流のチャンスを体感できました。

田中教授 若い人たちが少しずつ移住したり、二拠点居住を始めたりしているエリアは、自然にいろいろなコミュニティができており、富士吉田市はそのような例です。「まるサテ」という制度を設けており、これは、クラウドファンディングで実現したものです。また、富士吉田市は五重塔・桜・富士山の組合せで有名な新倉山浅間公園や、巨大な富士山を背景にしたレトロな商店街など、外国人も多く訪れる場所でもあり、都心から来た日本人、地元の人、外国人といった様々な人が集まってきます。面白がっている人が面白がっている人をひき付ける循環ができている例だと思います。

森田 西川さんは、夜に地元の焼き鳥屋に行ったら、地元の人と交流ができたとのことですが、普通に旅行した場合に地元の居酒屋に行けば同様のことは体験できると思います。あえてワーケーションとして行く意味はどこにあるのでしょうか。

田中教授 地元の人が提供する情報や、そこから展開する話題が変わると思います。旅行客の欲しい情報や話したい話題は観光名所やグルメスポットなどが主流だといえます。他方、ワーケーションだと、ある意味「ゆるやかで仲良しな同僚」と飲んでいる状況に似ています。ワーケーションを受け入れる地元の方や、観光だけでなく仕事もしに来ているワーケーションの人々は、仕事の話をすることもあれば、普段の生活の話をすることもあります。かといって、最先端の難しいビジネストークを声高に語るといったイメージでもなく、あまりプライベートに踏み込まないけど表面的な観光案内に終始するわけでもないという、心地いい距離感を知っている人々が集まる傾向があるように思います。

森田 宮田さんも富士吉田市チームでしたが、どのような様子でしたか。

宮田（広報室） 私は、「まるサテ」のパスポートを購入し、民家を改装したような場所や富士急ハイランドのワーキングスペースなどに行ってみました。面白い試みだと思いましたし、今回は観光シーズンからはずれていたため、人も少なく、仕事と遊びを切り替えて過ごすことができました。ただ、弁護士業務は個室の確保が必要な場合もありますので、これが混雑するトップシーズンになったら別の手当が必要になってくるかもしれないと思いました。

田中教授からの説明にもあったように、交流あってのワーケーションという部分は大きいと思いました。実際に体験してみると、やはり人と関わる中でビジネスにつながる部分もあったり、純粋に新しい仲間が増えたりといった経験をしながら、半分仕事で遊びに行くといった場所を見つけられればそれがワーケーションにつながるのかなと思いました。そのような意味で、もともとイメージしていた、旅先でちょっと働くといったものとは印象が変わった部分がありました。

田中教授 普段できない触れ合いや体験を織り交ぜながら、変化を体験する時間と仕事をする時間をマネージしていくことが大事だと思います。もちろん、他人との交流が苦手な人もいるかと思うので、無理をせず、自分に合った形で実践される

のがいいと思います。

一方で、「ワーケーションなんかすると、サボる人がいるのでは」という管理側の視点もあるかと思いますが、そもそも、自律的に時間をマネージすることができない人には向かない仕事の形態といえるかもしれません。そういう意味であれば、弁護士の皆さんは、普段から自己管理のもとで仕事をされているので、ワーケーションに向いているかと思います。

青木（広報室） 現にワーケーションを取り入れている企業において、労働時間の管理はどのように行われているのでしょうか。

田中教授 基本的にはリモートワークやテレワークのルールをそのまま適用しているところが多いと聞いています。また、中抜けの問題もありますが、育児や介護などの様々な事情があり、ある程度ゆるやかに運用されているようです。

青木 情報セキュリティはどのような状況でしょうか。

田中教授 セキュリティ規程が定められていますが、厳格なセキュリティを求める企業はホテルのWi-Fiを使うこと自体禁止しており、セキュリティが高いポケットWi-Fiを持たせるといった対応をしているようです。これは、ワーケーションのためというよりは、リモートワークやBCPの観点などからリモートのセキュリティ対策として行っている企業が多いです。

青木 ありがとうございます。田中教授のご指摘のとおり、弁護士は自由度の高い仕事ですが、事務所で雇用されている勤務弁護士もたくさんいるので、経営側の弁護士が懸念しそうな点を質問させていただきました。

森田 青木さんは、従来のイメージに近い「リゾートっぽい場所で仕事をする」という形式を体験したと思いますが、いかがでしたでしょうか。

青木 いいなと思ったのは、せっかくリゾートっぽいところに行ったのだから、その場所を目一杯楽しむために集中して仕事を終わらせようというモチベーションは高まったことです。その反面、どっちつかずで、仕事なのか遊びなのか、遊んだとしても休んだ気にならないのではという感じもしました。

田中教授 私もそんなにできていないのですが、朝、軽くジョギングをしたり、散歩をしたりするのが好きという人たちにとっては、旅行先で環境が変わるというのは朝の仕事のモチベーションが上がるそうです。

森田 話は少し戻りますが、私は、関係人口や自分の価値観と違う人と交流する交流型のワーケーションに強くひかれます。どの業界もそうかもしれませんが、弁護士の仕事を続けていると知らないうちに業界の価値観に影響されているかと思います。そんな中で、自分と違う価値観の人と交流することで、新しい発想を得たり、自分のコミュニケーション方法に変化をもたらしてくれたりするかもしれない交流型ワーケーションは弁護士にもお勧めなのではないかと思いました。

田中教授 私は、今度、和歌山県の動物園で飼育員の人と過ごすワーケーションプログラムを体験する予定です。飼育員の価値観は、おそらく私たちとはまったく違うと思うので楽しみです。

また、「身バレ」していない関係の中で、いろいろな人と接点が持てるというのは、楽だし、素の自分に向き合うことができると思います。私も甲府にいると「先生、先生」と呼ばれてしまうのですが、別の場所に行って「旅行会社で長く働いていました」程度の自己紹介にとどめると「旅行好きな人」と見られて安心して気楽に話ができます。

青木 適度な距離感というお話がありましたが、深入りせず普段の自分とは違う形でSNS上で交流することと似ている気もしました。

田中教授 そうかもしれませんね。皆様がワーケーションを体験されて、ここがもう少し充実していたらといったことはありましたか。

西川 コワーキングスペースだと、オープンスペースで電話ができなかったり、パソコンで作業をするにも周囲の視線を気にしなければならなかったり、制約はあると思いました。Wi-Fiの安全性も気になりました。また、細かいことですが、ちょこちょこお金がかかるなと思いました。例えば、1人用の個室があれば十分なのですが、数人

用の会議室を1時間1000円で借りなければならなかったり、ちょっとコーヒーを飲むとなると250円だったり、一つ一つは細かいのですが、滞在期間が長くなればそれなりの出費になるかと思いました。あと、サテライトオフィス間の移動のために、乗り捨てできる電動式のレンタサイクルがあると便利かと思いました。

宮田 弁護士という面で捉えると、打合せになるとどうしても個室は必要となります。せっかく景色がいい場所に行くのだから、景色も楽しめる仕事用の個室があるといいなと思いました。

柳楽（広報室） 私は、田中教授に紹介してもらった鎌倉のワーキングスペースに何か所か行き、見学させてもらいました。鎌倉らしい景色が見える個室があったり、ヨガなどのリフレッシュのプログラムを用意してくれている施設もあったり、そういったものを取り入れて気分転換や、自分と向き合う時間をつくれば、結構充実した一日が過ごせるのではないかと思いました。施設の方からもお話を伺いましたが、複数の方から「仕事と余白」というキーワードが出てきて、ほどよく力が抜けた感がある鎌倉らしさを感じました。1回行って終わりではなく、自分で気に入った場所を見つけて何回か通って地域との関係をつくることも大事であると思いました。

田中教授 そういう意味では、鎌倉も富士吉田も通いやすい場所であり、月1回といったペースで訪れる方もいます。そういった方は、密室が不要な仕事や持ち物が少なくても済む仕事をその日のために用意するなど、うまく調整して通い、現地で顔見知りを増やしているようです。

広報室の皆様には、事前のレクチャーでワーケーションにはいろいろな可能性があるという説明をしたので、ある程度の知識や情報をもって体験されたと思います。そして、実際に体験されてアップデートされたこともあるでしょうし、逆に、私自身も気付いていないような可能性を感じられたように思います。

弁護士の仕事は自分で広げられる可能性がたくさんあると思います。私も大学の教員になったおかげで、大学とは関係のない仕事や経験をする機会をたくさんいただくようになりました。先ほど、「仕事と余白」というお話も出ましたが、皆様の仕事も自分で努力しない限り、絶対に永遠にヒマにはならないと察します。そのような意味では、例えば、「毎月第2金曜に意識的に時間をつくって、仕事を持っていってもいいので、好きなことと組み合わせるワーケーションをする」といった余白を設けてはいかがでしょうか。山梨だと、ワイン好きが自然と集まって、みんなで畑を借りて毎月集まってぶどうを育てている例があります。そのような活動も、これまではわざわざ仕事を休んで有給休暇をとらなければならないというハードルがありましたが、ワーケーションを活用するなどして楽しくやっているようです。日々仕事で忙しい弁護士の皆様だからこそ、ワーケーションは仕事と余白のバランスを考えるきっかけになるのではと思います。

私は、今年の3月にバリ島のコリビングと呼ばれる形態の施設の視察に行ってきました。利用者は圧倒的にヨーロッパからの人が多かったです。興味深かったのが、スタートアップ企業の立ち上げの場所として利用されていることでした。そのような企業は軌道に乗った後はリモートワークが中心になるものの、立ち上げ時は濃密なコミュニケーションが必要です。そこで、日中は目一杯仕事をして、夕暮れくらいからビーチで遊ぶなどして、チームで一気に事業を立ち上げる場所として、冬でも暖かくてヨーロッパよりも低コストで済むバリ島が好まれるようです。

デジタルノマドという、ITを活用して国内外を旅しながら働く人々を誘致する活動が世界で活発化しています。日本では、関係人口は国内の人を想定していますが、デジタルノマドビザを検討するといった話も出てきており、関係人口の拡張の兆しが見えてきています。

今後、ますます、様々な人と交流するパーソナルコミュニケーション力を上げることが人生や仕事を豊かにすることにつながっていくと思いますので、ぜひワーケーションを活用してみてください。